HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	伊井直行論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	川﨑, 俊
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13712号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76332
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Shun_Kawasaki_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　川　﨑　俊

学位論文題名
伊井直行論

・本論文の観点と方法

本論文は、伊井直行の小説作品、とりわけ、「会社員」が重要な役割を担う作品群と伊井自身による「会社員小説論」との関係性や、表象される「会社」および「会社員」の特質を詳細なテクスト分析を通して明らかにするものである。伊井の「会社員小説」（論）は、「会社」や「会社員」が、「近代小説」においてなぜ不可視化されてきたのかという観点から「近代」と「近代小説」とのギャップを突いたものであったと評価する。そこには、「近代小説」やそれに関する従来の言説とは異なる極めて重要な問題提起があり、そうした視座から伊井作品の全面的な再評価を目指すものとなっている。

従来の評価において、伊井の「会社員小説」（論）の可能性が誤読され、「会社員（小説）」が「サラリーマン（小説）」と混同されていた点を、まず問題視する。伊井の「会社員小説」（論）の独自性の把握には、「会社員小説」以外のマジックリアリズム系作品等との関連性の分析など、伊井の創作活動全体からの捉え直しが必要であるにもかかわらず、これまで、村上春樹らの同時代作家の影に隠れて、伊井に関する分析自体が全く不足していたために、「会社員小説」の問題意識の根幹も、いまだに理解されていなかったのである。

本論文は、このような先行研究の不備を批判しつつ、伊井の「会社員小説」を日本近代文学史の中に改めて位置づけ、その可能性を追究することを目的としている。

・本論文の内容

本論文は、三部構成・全八章から成る。

第一部では、主にデビュー作の「草のかんむり」の読解から、伊井の小説群を貫く問題系を析出する。

第一章では、先行する村上春樹の小説とラテンアメリカ文学ブームを導きの糸として、伊井の創作活動と同時代状況との関係を明らかにした上で、「草のかんむり」（『群像』一九八三・六）のテクスト分析を行う。この小説は、無意識的なものとしての他者性＝動物性を導入し、フィクションとノンフィクション、人間と非人間、イメージと言語等の境界を複雑化する様相を描きながら、書くことそれ自体を主題とするメタフィクションが成り立たなくなる地平を示したとする。最終的には、それに代わる〈記述＝撮影〉とでもいうべき論理を手に入れたのだと結論づける。

第二章では、第一章の内容を踏まえ、伊井の作品群における「草のかんむり」の特徴の反復を確認する。とりわけ、小説それ自体の条件を探るメタフィクション的問題系が、「ジャンナ」（『群像』一九九三・六～八）と『進化の時計』（講談社・一九九三）という二つの小説に再導入されたことを指摘する。本章では、伊井の創作活動に一貫する問題意識を踏まえつつ、「人間」をめぐる概念が変化した状況においても、「会社」と「会社員」の問題が残存していることを示し、第二部以降の議論の前提を確認する。

第二部では、平成期初頭に発表された、「会社員」と小説との関係をめぐる伊井の創作活動の可能性と限界を取り出す。

第三章では、「会社員」の問題を本格的に取り上げた最初の作品、「さして重要でない一日」（『群像』一九八九・三）を分析する。とりわけ「彼」という主語の分析を手掛かりに、「会社員」の主体性と、それに即して導入された文体の特徴が、国家と切り離された領域として「会社」を表象するものであったことを明らかにする。そして、それと相反するような、「人間」をアクシデントの可能

性それ自体として問うことを、ハーマン・メルヴィルの小説「（書写人）バートルビー」の読解を手がかりに、〈バートルビー的問題〉と捉え、「会社」と「人間」とのギャップをいかに考えるかが、後年の「会社員」と小説との関係をめぐる議論の中心的課題となっていることを指摘する。

第四章では、小説「雷山からの下山」（『新潮』一九九〇・五）を分析し、伊井が、新たな叙述の方法を模索していたことを明らかにする。「雷山からの下山」では、前章までで取り上げた小説と異なる方法がとられている。本作は、物語内容と文体について、一種の「平板」さを打ち出すことで、結果的に来るべき資本制社会における複雑な歪みを浮上させていると述べる。

第五章では、「雷山からの下山」のスタイルを継承した「星の見えない夜」（『群像』一九九一・二）を主に取り上げる。本作は、「会社員小説」論の基となった文章と同時期に書かれている。小説と論考とを関係づけながら、本作には、「会社」それ自体が近代的「人間」であるという様相が示されているという。さらに、同時期の中上健次の文学的試みと対照し、「星の見えない夜」が、近代化と近代小説との隔たりを指し示していると論じる。

第三部では、二一世紀に入って再び本格化した、伊井の「会社員小説」（論）に関する活動を分析する。

第六章では、「ヌード・マン・ウォーキング」（『新潮』二〇〇六・三）と「ヌード・マン」（『愛と癒しと殺人に欠けた小説集』所収）という、一つの題材をめぐって書かれた、二つの異なるヴァージョンを比較検討する。両小説には、伊井が「会社員小説」の執筆から遠ざかっていた一九九〇年代以降の資本制と監視社会が結託していく過程が描かれているという。父親であり「会社員」である男が、裸で外を歩き木に変身する記述を通じて、そこから抜け出る試みとその困難さが示されている。そしてそれが、「会社員小説」を考える際の重要な手がかりともなることを明らかにする。

第七章では、『会社員小説をめぐって』（『群像』二〇一〇・七～二〇一一・一二）における「会社員」概念の特徴を取り出す。伊井は、先行する「会社員小説」論の内容を継承しつつ、「会社員」を特徴づける概念として「公私の分断」を導入することで、「会社員小説」というサブジャンルを規定することができたという。さらに、公私の分断と分裂という「会社員」像を通して、公共性や「人間」を小説において記述する可能性を押し広げようとしていることを指摘する。『会社員小説をめぐって』に先行する小説『ポケットの中のレワニワ』（講談社・二〇〇九）と併せて分析することで、伊井の試みの意義をいっそう明確にする。

第八章では、『会社員小説をめぐって』の発表後に書かれた長篇小説「尻尾と心臓」（『群像』二〇一四・七～二〇一五・一、二〇一五・三～二〇一五・一二）を分析する。本作は、約四半世紀ぶりに発表された「会社員小説」であり、はじめて女性の「会社員」が小説の中心人物の一人となる。「尻尾と心臓」では、「会社員」概念とポリティカル・コレクトネスとの対立的な関係が踏まえられている点に着目する。そして、そうした関係性からずれながら、複数の共同性を横断しつつ自己を規定する「会社員」の記述へと向かい、新たな個人主義の模索を行われたのだと分析する。

終章では、各部の論旨をまとめ、伊井の創作活動を総括する。